

小松邑志 下篇

七

和書門類			
二九四〇二號	函	架	冊
一	一	一	一
五冊	架	函	冊

内閣文庫			
二九四〇二號	函	架	冊
一	一	一	一
三架	冊	函	冊

内閣文庫			
番號	和	29402	
冊數	15 (7)		
函號	176	33	



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



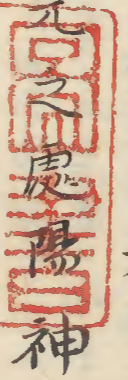
...

少抄卷五

下卷一



書紀曰 畧因問陰神 伊弉册尊 曰汝身有何成耶對



伊弉諾尊 曰吾亦有雄元之



處思欲以吾身元處合汝身之元處於是陰陽始瀆
合為夫婦及至產時先以淡路洲為胞意所不快故

名之曰淡路洲 廼生大日本 日本此云耶麻騰 豐秋津洲次

生伊豫二名洲次生筑紫洲次雙生隱岐洲与佐渡
洲在人或有雙生者象此也次生越洲次生吉備子
洲由是始起大八洲國之号焉即對馬嶋壹岐嶋及
處々小嶋皆是潮沫凝成者矣亦曰水沫凝而成也
○古事記曰 畧次生伊豫二名嶋此嶋者身一而有

面四每面有名故伊豫國謂愛比賣讚岐國謂飯依
比古粟國謂大宜都比賣土左國謂建依別 下畧

本居宣長二名ノ解古事記傳三二名島コハ河波讚岐伊余土佐ノ四國ヲ總ク
ル名ナリ萬葉三ニ白浪宇伊余ニ回之ト有モ四國ヲ總テ云リト聞工是本ハ一國ノ名ナル
ガ大名ナレルヲ茫然ノ如シ二名ハ本ヨリ大名ナルヘシ此名ノ義ハ名ハ借字ニテニ
至ナリ書紀應神卷ノ大御歌ニ河波流辨摩異耶敷多那羅拜豫呂辨摩
摩之摩是ハ淡路ト小豆島ト並ツルヲヨミタマヘルニテ此ノ二名ノ島ノコトニハ有子ト
ニ並テフ言ノ証ナリ萬葉九ニ並汎波ノ山トモ有リサテ此島ハ飯依リ比古ト愛比賣
ト女男並ニ建依別ト大宜都比賣ト又並ヘルヲ二並ト云フ

此島東ヨリ見レハ讚岐ノ飯依比古ト粟ノ大宜都比賣ト二並ナリ西ヨリ見
レハ土佐ノ建依別ト伊余ノ愛比賣ト二並ナリ北ヨリ見ルモ南ヨリ見ルモ同シ
故ニ男女ノ名ヲ負ヒテ二並ノ嶋ト云ナラム
又伊豫ヲモ本ヨリノ大名トセハ弥ノ意ニテ
イヤライヨトモ云

彼御歌ノ語ノ如ク亦二並ノ嶋ナル可シ
又云伊豫ヲ伊余トモ書リ此ハ伊豫ノ郡ヨリ出タル名ナルヘシ其例多シ 神名帳ニ彼郡
ニ伊豫ノ神ノ社モ有リ同郡ニ伊豫豆比子ノ神社ト云モ有リ
コハ地ノ名ヨリ出タル神ノ名ナル可シ

名ノ義思ヒ得ス

○愛比賣ハ兄弟ノ女子ヲ兄比賣弟比賣ト云例多シレハ此國ハ女子ノ始ノ意ニ兄比賣キ
書紀皇極卷ニ長女トモ有リ
伊勢國多氣郡ニハ兄國弟國テフ所ノ名モ有リ

又伊勢ヲ本ヨリノ大名ニシテ見レハ彼大御歌ノ如ク弥ニ並宜島々ノ意ニテ愛ハ宜ニテ意子
吉キヲ愛ト云例多シ

比賣ハ比古ニ對テ女ヲ義テ云稱ニテ比ハ產巢日ナトノ日ノ意ナ
○伊豫風土記曰伊豫國自郡家以東北有天山所名天山由者倭有天加見山自天々降シ
時二分而以行端者天降於倭國以行端者天降於此國因謂天山也
此条引左請書事關剖判故舉于此

○書紀景行天皇紀 喜次妃安倍氏木事之女高
田媛生武國疑別皇子是伊豫國御村別之始祖
也

本文所記下文ニ七十餘子 景行御子皆封國郡谷如其國故当今時謂諸國之別
者即其別王之苗裔焉

○同紀初日本武尊 中畧 又妃吉備武彦之女吉備

穴戶武媛生武敷王五十城王其兄武印是讚岐
綾君之始祖也第十城別王是伊豫別君一作敷之始祖
也

古事紀曰建具兒王者讚岐綾君伊豫別君登表之別麻佐首官首之別等祖

○同紀五十一年暮初日本武尊所佩草薙橫刀
是今在尾張國年魚市郡熱田社也於是所獻神
宮蝦夷等晝夜喧嘩出入魚禮時倭姬命曰是蝦
夷等不可近就神宮則進上於朝廷仍令安置御
諸山傍未經幾時悉伐神山樹叫呼隣里而骨人
民天皇聞之詔群卿曰其置神山傍之蝦夷是本

有獸心難住中國故隨其情願令班邦畿之外是
今讚岐伊勢或曰姓氏錄作伊豫里送安藝阿波凡五國佐
伯部之祖也讚岐上脫播戶

谷川氏曰佐倍水与佐波久同訓

○同書允恭天皇二十四年夏六月御膳美汁凝
以為冰天皇異之卜其所由卜者曰有内乱盖親
親相亥子時有人曰水梨輕太子亥同母妹輕大
娘皇女因以推問焉辞既實也太子是為儲君不
得罪則流輕大娘皇女於伊豫

○同紀四十二年春正月天皇崩允恭冬十月瘞禮

畢之是時太子輕皇行暴虎淫于婦女國人謗之群
臣不從悉隸穴穗皇子允恭天皇弟二子
即安康天皇爰太子欲襲穴
穗皇子而竊設兵穴穗皇子復興兵將戰中畧時太
子知群臣不從百姓亦違乃出匿物部大前宿祢
之家穴穗皇子聞則圍之大前宿祢出門而迎之
穴穗皇子歌之曰歌畧大前宿祢吞之歌畧乃啓皇
子曰願勿害太子臣將議由是太子自死于大前
宿祢之家

註一云流伊豫國

○同書舒明天皇紀十一年十二月己巳朔壬午十四日

幸于伊豫温湯宮十二年夏四月丁卯朔壬午天
皇至自伊豫便居既坂宮十七日

按先是三年秋九月幸有馬温湯又十年冬十月幸有馬温湯宮云

○同書齊明天皇皇極重祚本朝
重祚等于此紀七年春正月丁酉朔

壬寅御船西征始就于海路甲辰御船到于大伯カホリ

海時大田姬皇女天智皇女產女西日庚戌御船泊于伊豫

熱田津ニキタツ石湯行宮熱田津此云你积陀豆三月丙申朔庚申御

船還至于娜大津廿五日

釋云于娜者伊豫國宇摩郡也長津宮在伊豫
居磐瀨行宮天皇改此名曰長津

復四月百濟福信遣使上表乞迎其王子紇解

註釋道頭日本古紀曰百濟福信獻書祈其君紇解於東朝一本之四月天皇遷居於朝倉宮

式土佐國朝倉神社立朝倉村風土記天津羽之神谷川氏曰朝倉宮近前國上座郡也今其故墟号宮山寺

五月乙未朔癸卯天皇遷居于朝倉橋廣庭宮

範序曰邦人傳之齊明天皇紀所載朝倉宮本州越智郡朝倉即其地也

按越智郡有三花御及朝倉御与書紀所載地名畧同然則邦人所傳恐非虛妄又越智郡長澤村有天皇祠祭天智天皇云是亦以可為一證

是時削除朝倉社水而作此宮之故神念壞殿亦

見中由是大倉人及諸近侍病死者衆暑七月甲

子朔丁巳廿四日天皇崩于朝倉宮八月甲子朔皇太子

天智奉徙天皇喪還至岩瀨宮是夕於朝倉山上有

鬼著大笠臨視喪儀衆皆嗟恠冬十月癸亥朔己七日

巳天皇之喪歸就于海

○同書天智天皇紀元年七月皇太子天智遷居于

長津宮稍聽水表之軍政

範序按齊明帝六年十二月遣兵核百濟而擊新羅七年夏五月幸朝倉宮徵兵欲征新羅六月遂崩于朝倉宮八月遣阿曇比羅大阿曇百枝等核百濟還豐璋於其國豐璋百濟

王子今年唐高宗親朝元年獲定方為將代百濟

○同書天武天皇紀十三年冬十月己卯朔壬辰十四日

逮人定大地震奉國男女叫唱不知東西則山崩

川溢時伊豫國湯泉沒而不出土佐國田苑五十

餘萬頃沒而為海古老曰若是地動未曾有也

釋曰本紀卷第十四述義部章伊豫溫泉註曰
伊豫國風土記曰湯郡大穴持命見悔耻而宿
祭毗古那命欲活而大分速見湯自下搦持度
未以宿奈毗古那命而浴瀆者暨間有活起居
然詠曰真整寐哉踐健跡處今在湯中石上也

範序按見悔耻上下疑有闕文

古史成文云禹大名年逐神遠延而伏之時少思古那神欲活之而以大分速見湯自下搦持度夫而瀆浴則有暨間而活起居然詠曰真整寐哉而踐健之跡處於今存湯中之石上伊豫國之溫泉是也仍憫人草之病二柱神相識而始製藥湯泉術矣伊豆國神湯亦其數而指根之元湯是也

凡湯之貴奇不神世時身於今世凍疾痾萬生為
除病存身良藥也天皇等於湯幸行降坐五度也

以大景行帶日子天皇與大后八坂入姬命二軀為一

度也以帶中日子天皇與大后神功皇后息長帶姬二軀為

一度也以上宮聖德皇為一度及侍高麗惠總葛

城臣等也于時立湯岡側碑文記云

法興六年十月歲在丙辰我法王與惠總法

師及葛城臣道遙夷與村正觀神并歎古妙

驗欲叙意聊作碑文一首

惟夫日月照於上而不私神并出於下無不給
萬所以機妙應百姓所以潛扇若及照給無偏
私何異于壽國隨草臺而閑合沐神并而瘳疹

詎非于落花池而化溺窺望山岳之巖崿及薰
子平之能往椿樹相應而穹窿實相五百之張
蓋臨朝啼鳥而戲吐下何曉乱音之聒耳丹花
卷葉映照玉泉弼菀以垂井經過其下可優遊
豈悟洪灌霄庭竟與才拙實慚七步後定君子
幸無唾咲也

以野明岡本天皇并皇后二軀為一度以後本岡本天皇
近江天智大津宮御宇天皇淨天武湖原宮御宇天皇三軀
為一度此謂幸行五度也

杏山村丹知所記溫泉古碑事曰此碑石在伊勢中里中里埋之其所在を
とす凡萬葉集日本紀等曰天皇伊豫乃溫泉之幸行也事或説せり

徳風土記に上宮太子湯丸岡に碑文を建まるとの引証釋日本紀にも出たはまを記
志め其等も傍ら好事家の人の苦う其石碑は存りあそんと欲する者之説は
道後村義安寺に本尊此碑石なりと疑ぬ善師如未土中出現の善像ありと
せば木像あり石像ありし行基も石像彫刻ありし中秘佛あり人走り
わらわる事なし衆人を知る如く土中出現ありし中秘佛ありし善像ありし
とのありし人れ疑わしむ其理なきありしれし此年より湯治の男者
李山の好事家此人、此善像を占せたり何との易者と傳へたり其貴人の墓あり
又善碑石あり石は文字に彫刻ありしものと占いぬ此年我友大高坂四郎兵衛
致仕亭李山ノ雜話に伊勢道後南町湯月古岡西守佐の儒宮の下に善像ありし事
せし方工り此との史年義安寺本尊の佛事考撰に記ありし處ありて修補する時汚墨
此板板等流形跡有りを見たり石を建文字を彫り其文字を辨しく泥り以て
隠しけりといふと詔りぬ是善像を参考する所なり衆人れ疑ひしを并合し徳風土記
流の岡丸則と記すとすも溫泉郡の内ありせば天下此目と見て見る時湯の岡といふ
もも尚よりとせん此年圓友の沙門明月の室間平九郎と云る易ありしと依り碑
石の土中埋はるるとを記して一乃湯の石北西邊を占へんとす地下あり
大なる多く出されしは善像なりしなりしと明りし文字筆此村人より卓越し
是等の事と述へたるありしなりしと常々ありしは富高氏と村人に言はるるを
發起して其方一錯し財を費すなりし事面中其れ其行て酒肴を飽
き遊覧する情を楽しめる四月の平生れ行に相傳へし事墨正に久留
宮石碑と尋求んとありし義安寺に善像彫りし事と懸念し虚實

を知居身討畧こそあるを道教千年地中は増とさす出する候との、すくを
ある期ありしより天命なり既に多賀城の古碑も伊達吉村公れ時必とるを
求られしが遂に地中より城あり字に在碑面を掘りて天下乃珍島とせし
遊記も多賀城より七八里中東北部領の野辺路近在壺村といふ其村
又壺山といふ山あり壺山石碑は村民其碑を言給社を建て是れ壺
古より標に閑麻なる事あり碑に文字あり方々大字は東といふ字を彫
別しりといふ其碑文のあり事代記に壺石摺ありとある事其れを
知人あり近年始り家の人此碑文ありて傳へし欲されしを道教の事
ありて遊行乃人稀なりといふも壺の石文と稱しありしは壺を記せし録倉右大臣
此歌と書つて壺の壺の石文と稱しありしは壺を記せし録倉右大臣
城の東西南北に壺の石碑を今在り行つて西碑あり壺村に碑ありし
二碑身出るといふも南北に碑を土中壺と不見事社惣とて壺と稱漢と
と古碑を給矣といふ壺の石文と稱しありしは壺を記せし録倉右大臣
乃碑多賀城に碑ありしは壺の石文と稱しありしは壺を記せし録倉右大臣
若碑石ありしは壺山の碑を時と同一と稱しありしは壺を記せし録倉右大臣
く同麻なる事の期ありしは壺の石文と稱しありしは壺を記せし録倉右大臣
院との志も伝ありしは壺の石文と稱しありしは壺を記せし録倉右大臣
せば天下に珍島二つとありしは壺の石文と稱しありしは壺を記せし録倉右大臣
よれとありしは壺の石文と稱しありしは壺を記せし録倉右大臣

弘化三丙午十一月日

萬葉集

齊明天皇 額田王

熱田津の船のりをむと月夜しの海もゆなひぬなむと記さ

或云若者温泉の地名をあり田津又熱田津と云ふ温泉の邊に潮通し
船つりありしは今者地形変りて田圃とありぬ又田津熱田津と
名しと津の岩残りしと云ふ

同書

山部赤人

至伊豫温泉作歌一首 五短歌

あゝあろすの沖のうらをれ志れあをまの盡湯を
はたに何れしも壺山のありしれくもととて
うねのいづこそのあひなたしとてああ
わらひせしゆねくのかげし
射秋庭 三陽 橋 臣

木以流きよさるゝあくしものこゝろをのりひよとを
行幸
新ふるまひしひゆのんみゆ記しととら

反歌

萬葉拾遺抄曰伊豫風土記云上宮聖德皇子立湯園
側碑文立其碑文所謂伊佐尔波園也当土諸人等欲見
其碑率引未因謂伊佐尔波也

とらしたのあゆまや人のあましとらと船のしんえとのあま

あまのあま

伊予の湯乃ゆきはつらつらとてあまのあま

季經 一破補

伊予の湯乃ゆきはつらつらとてあまのあま

あまのあま

古歌集
いよの湯乃ゆきはつらつらとてあまのあま

六卷集
いよの湯乃ゆきはつらつらとてあまのあま

源氏物語の湯乃ゆきはつらつらとてあまのあま
あまのあま

一夕話

山部赤人先相評なる山邊と書く事誤なり萬葉集の
山の部の宿禰赤人とは山部の部の子孫也天智天皇の御
時伊豫の兼目部ヲ捕と云人ト始て山部の部を賜ふ
紀よりくくり又其後桓武天皇と山部の王と申しし
姓を改て山とせしむる
萬葉集の伊豫の温泉
あり温泉の章此國史に考ふるに昔其代々
帝の後終りしと見ゆ此帝の七年あり
七十六年あり志其貴貴なり人故國史に載し

り又の海人を若年あはれしつゝ事行はる
れは伊豫へ行きて新の入湯文波の國の守の下司さな
まて下しとて又板御なるゆへおもむかれし事も
これより日本紀顯宗紀に播磨國司山部連先祖伊豫の
部少捕と行ふよりておんいれりされし若き時都の
れは由りて故郷へ帰るとし事行はるて其時の歌よ
未目部少捕氏と山部と何れも一後し子孫程伊と有
多しや此別とて我より由縁ありて後國を教福事有
れは東國に住し事行はるる人九皇聖武天皇の
神龜元年石見國にて卒せし事ありて其人は天子の侍
候し紀の玉子行きて天平年中は吉野の難宮ありて又春日
神岳ありし事萬葉集に正しく見ゆれば人九皇の卒
後にも久しく在りたる事ありし帝の寵遇とほしき事
候に人其始末を記し難し時代を元正天皇の御
より聖武天皇の御代の事ありし事あり

道後温泉壅不出記

推古天皇三十六年戊子地震湯設而不出至舒明天皇二年庚寅湯再出 兼序按書紀今年不記地震之事

天武天皇白鳳十三年甲申十月十四日逮于人定大地震湯泉設而不出 自推古天皇三十六年迄白鳳十三年五十七年

享祿年中賊徒起テ湯の園ニ戦ハ大刀の汚血を洗はば温泉涸とて忽出れ仍て湯の神社より所ぬ湯設は出る事を得孝り此時一の湯に釜を居へ河野太郎通直享祿四年と記す

自白鳳十三年迄享祿四年八百四十七年

慶長十九年甲寅十月廿五日大地震温泉不出

自享祿四年迄慶長十九年八十三年

寛永二年乙丑三月十八日地震温泉不出

自慶長十九年至寬永二年十一年

貞享二年乙丑十二月十日大地震泥涌出後清

自寬永二年至貞享二年六十一年

宝永四年丁亥十月四日諸國大地震温泉不出翌年閏正

月廿九日如元出同四月朔日ヨリ入湯

自貞享二年至宝永四年二十三年

嘉永七年甲寅十一月五日七日大地震温泉不出明年四

月頃復舊湯治始ル

自宝永四年至嘉永七年百四十八年

因記嘉永甲寅地震ノ明年四月中旬ヨリ

毎月々初ヨリハ
中旬ノ潮高シ

潮常ニ比スレハ数尺ヲ増ス依之海打ハ月々其汚ニ喧

十月ヨリ潮勢表安政
三丙辰七月潮又高

宝永ノ地震後モ潮汐高リシ了海村ノ

記録ニ残レリ古昔モ同リ然ルニヤ書紀白鳳十三年

十月大地震上ニ記ス同十一月ノ紀ニ十一月戊申朔庚戌

土佐國司言大瀬高騰海水飄蕩由之運調船多没失馬

戊辰三十日昏時七星俱流東北則隕之庚午二十三日日々没時星隕東

方大如倉天文悉乱以星隕如雨是月有星孛于中央與

昂星雙行之及月盡失焉

一書云慶安二年己丑二月五日豫州松山宇和島邊大

地震ス城ノ石垣崩レ民家多ク破損ス

元禄七年甲戌閏五月廿五日伊豫國大地震火事

○同書地統天皇紀三年八月辛巳朔廿一日辛丑詔伊豫摠

領田中朝臣法麻呂等曰讚吉國御城郡所獲白
燕宜放養

五年秋七月庚午朔壬申三日伊豫國司田中朝臣法
麻呂等獻宇和郡御馬山白銀三斤八兩銚一籠
十年夏四月壬申朔戊戌以追位大武授伊豫國風
速郡物部粟與肥後國皮石郡壬生諸石并賜人
絶四匹絲十絢布二十端鉄二十口稻一千束水
田四町復戶調役以久苦唐地

○統日本紀文武天皇紀元年閏十二月己亥播
磨備前備中周防淡路阿波讚岐伊豫等國飢賑

給之又勿收貢稅

二年七月己未朔伊豫國獻白錫日鑑

九月戊午朔乙酉上裏令常陸備前伊豫日向獻朱
砂

三年八月壬寅伊豫國獻白燕

大宝元年八月辛酉參河遠江相摸近江信濃越
前佐渡但馬伯耆出雲備前安藝周防長門紀伊
讚岐伊豫十七國蝗大風壞百姓序舍損秋稼

或書云大宝二年折本躬都羅志天武女序流于伊豫

慶雲三年二月庚寅河内攝津出雲安藝紀伊讚

岐伊豫七國飢並賑恤之

四月壬寅河内出雲備前安藝淡路伊豫等國飢
疫遣使賑恤之

四年十二月戊辰伊豫國疫給藥療之

○同書元明天皇紀和銅五年七月壬午令伊勢

尾張參河駿河伊豆近江越前丹波但馬因幡伯

耆出雲播磨備前備中備後安藝紀伊阿波伊豫

讚岐等二十一國始織綾錦

六年詔畿内七道郡鄉名著好字

古事記傳ニ成務天皇の紀ニ定賜大國小國之國造亦定賜國々

之堺及大縣小縣之縣主也

國造

舊事紀なる國造本紀と云ふ所の國々の國造と

云ふ所の多し此代に定之賜は舊事に云ふ所國造

と云ふ所を以て此時更に定賜多し此代に定賜

有りつゝも此時更に定賜多し此代に定賜

國造とのみならず其因に預の君直別稱置なきも

包りり中畧地は孝德天皇の時きよまると古の御制を

皆承りて國造等と稱して其國々の大領を領する

と云ふ所なりしに代官録五に孝德天皇在國造之号

永從傳止し何れも違ふは傳代に其制を改めし

と云ふ所なりし國造と云ふ号ハ古を其後も何れも

又在子國造と國司とを一物に爲し何れも非ず

國造を其其代を傳て其國を在しし國を其京

より下されし年の限ありて替る物も趣異ありて孝徳
の治在、國造を以て國司とせりて云々も違へて其は國造
此治を以て國司の治とせりて云々も違へて其は國造

さて又後世に國造と云ふは此れは神代に遺りて
は先古に神事國政にありて孝徳の治代に國造を
國司と知りて云々なりと國の神事なりと云々の治に
國造の知りては別と云々續紀は為班大幣馳驅追諸國
を造入京なりとも見く其外も國造の神事ありて
諸書に多く見たりとされ其は別と遺りて後世に
は全く神代と云々なりとありて既に預聚國史より此を
神祇の部とせりて云々なりとあり

天武紀に天皇崩坐し時國あり國造等隨參赴各誅
之仍奏種之歌舞とあるは程古の儀の遺りて然る時

よも参上りての儀禮典にも仕奉りしなりけり

續紀に天武紀國大國造と國造とを併し續へりて
も見たり

書紀に成務天皇の五年秋九月を、則陽山河而分
國縣隨阡陌以邑里因以東西為日縱南北為日、

横山陽曰^{カケトモ}景面山陰曰^{カケトモ}背面とあり

抑上代の國境の別を細ある事等詳に記しけれ
ども古書にも事ありて其は續紀に記しありて
あるは厚の在りぬ際やある事等も無り都て
是なりとも國の界限ありて其は續紀に記し
ありて其は續紀に記しありて其は續紀に記し

此後にも姓氏録^{嵯峨天皇}卷二改合部ハ大彦命之後也允
五年成

恭天皇御在焉之造之國境之標因賜姓坂合部連

又孝德紀云大化二年詔宜觀國之壇塙或書或圖持赤奉示國縣之名未時將定云々

又天武紀云十二年遣伊勢王羽田公八國多臣品治中臣連大嶋采判官録史工匠者等巡行天下限定諸國之境塙然其年不堪限分十三年遣伊勢王等定諸國境

續紀十三云天平十年令天下諸國造國郡圖進なを云こと見えり漸きそ精しくなりけりすて國々の分属乃古書を見えり漸き水垣宮路

東方十二道 日代路も見ゆる東海道也 高志道 後の北陸道也 土佐國の路也

書紀同傳卷下

東海 崇峻の卷に北陸道東海道と見る 北陸

西海 山陽道也 四道 北陸東海西道と丹波也

景行卷云東山道十五國なりと見え

孝德卷云畿内の定見え

此は後の定見とは其界限の異なることありしを言ふ前出宗神卷仁德卷欽明卷などにも畿内と云ふは又見えたり其は多文のみあり

持統卷云四畿内と云こと見え

こは後の五畿内と同一南昔を河内和泉二國をいふ

天武卷云山陽道山陰道

成務卷云山陽山陰とありしを此二道と云ふなり

又東海東山山陽山陰南海筑紫と並て見え

此は北陸の入りたるなりと見え

又文武紀云七道と見え

さて諸國カ總ての教は古へは幾許とも云ふこと物見之
旧事紀の國造本紀に舉ぐ諸國をなすもあふ満多るも多かるを
ければ賜く

是も孝徳天皇はほきはほきはほきは

大凡諸國の古れ分さす方はほきの國を分て郡と一郡を分て御
とせしとほほ如くは降くはあはく國のわりの地をも又國
と云ふ類多しははは陸奥石城國造常陸仲國造とある
如き陸奥も國あるも其國の内ある石城をも同く國と云ひ常
陸の國の内は仲をも同く國と云 又書紀の經體卷の教は若ら此
國萬葉云若野の國初瀬の國なすも云ふ如く一是は若ら郡と
定くは程の地あるも通くは同く國と云ふは中畧縣あり
之は國よりさすは又村里ありと云ふは縣ありと云ふはし
つゆは某國の某縣と云ひ又神功皇后の臨み若羅縣之王嶋
里書紀の山宮神卷に第河原の陶の邑景行卷に八代縣の豐村
なとあると云ひて其稱の大なる少れを辨くはし中畧孝徳
紀及今云ふは果とあるも即御の事あるも出雲山生記あり

みは御の内より里あり其外より其某郷之某里と云ふ事
あり又御を面して里と云ふ事ありと云ひ中畧すて古は國
又縣と云は其元より地を云名牟良又佐カカありと云ひ人居を
云名と云え其趣異あるを存ての地を唐く人の居り其の
在て極るれ其唐缺く國てあつちりちりありと云ひ
牟良の佐カカより差別は牟良身大のほりも同くはと云
る若ら同くはり京を天佐カカと云ひ又奈良の京の附りも奈
良里も云ひ旧都を布流佐カカと云ふは云ひは云ひは牟
良をわくすは京ありと云ふことと云ひは知の事あり牟
良人の家の群里あり意佐カカ居住所の意あり
さて後より一國を二つに分又二國を一つに分せたりは云ふ
は此意を云ふはり新海を嵯峨天皇はほを弘仁十三年
は越前國を割て加賀國を建し是て二千八ヶ國
此のよきはと馬とをばを島と云て國とは云ふ

よ定はれぬ後今力如くよしくゆく草を家こしよ

昔の國の名をア字を以て某州と云ふは何れも是中へ取
なすなり一ヨ者れ漢國の定なり一効ひて云初は私に
よひて公の所制を何れは白皇國を以て州と云ふ所制を
たすことあり故古の正一ハ文書にはカレりも某州
と云ふことあり一ハ中界又近きを以て傳名あり孝徳
天皇の所せり天下郡縣の治ありは某國を以てカレり
名ありと云者何れも是中へ非はばは是を以て漢字
を以て改め給ふあり國ありを以て州と定む賜以
て曰とのまあるは古意より伊を以てては是を以
るの云は下界

何れも是より上り田を以て是を畠と云ふあり

書紀仁賢卷に曙此云波陀談和名抄又曙耕爰地也ま
畠一曰陸田和名八太介

甲を以ては田を以て畠を以て後ハ地名を以て其中ハ水の都ぬ

を畠と云ふ上田と云ふ水田より是を高く上りては由なる

中界のて漢字を用るを以てなりて此何れも是縣の字を

何れもはありては後ハ必しも朝廷乃御料地

ありては其の漢國を以て縣と云ふハ何れも是の地を以ては凡

て其縣と云ふはありてはあり

何れも是を以ては朝廷の御料の地と云ふはあり

のては後孝徳天皇の所せり是を以て其はを以て縣と云

ふは其の地を以て郡と名付て

一は漢國を以て州を以て郡と名付ては其例は
國を以て郡と名付ては是あり柳漢國を以て郡と
縣と名付ては是あり方郡を以て縣と名付ては是あり

方...を縣平小...
郡堂定...
か...は方小れ異...

天下悉く國を分多名を郡と定...

孝徳紀より凡郡以四十里為大郡三十里以下四里以上為中郡三
里者小郡

某國の某評富理と云あり

許富理と云は古より...
評富理...
皇國...
其國...
評富理と云は古より...
評富理...
皇國...
其國...
評富理と云は古より...
評富理...
皇國...
其國...

大神宮儀式...
評富理...
皇國...
其國...
評富理と云は古より...
評富理...
皇國...
其國...

七年十月乙卯朔美濃武藏下野伯耆播磨伊豫
六國大風糜屋仍免當年租調

○同書元正天皇紀靈龜二年五月辛卯太宰府

言豐後伊豫二國之界從來買成不許往還但高下尊卑不可無別宜五位以上差使往還不在禁限

養老二年五月庚子土佐國言公私使直指土左而其道經伊豫國行程迂遠山谷險難但阿波國境出相接往還甚易請就此國以為通路許之

○同書聖武天皇紀神龜元年三月庚申定諸流配遠近之程伊豆安房常陸佐渡隱岐土左六國為遠詠方伊豫為中越前安藝為近

二年閏正月己丑蝦狹俘囚百四十四人配于伊

豫國五百七十八人配于筑紫十五人配于和泉監焉

元年五月壬午泛五位上小野朝臣牛養為鎮杖將軍令鎮出羽蝦狹軍監二人軍曹二人云云十二月乙酉征表持節大使正四位上藤原朝臣宇合鎮杖將軍從五位上小野朝臣牛養等來歸云云

○同書孝謙天皇紀天平勝宝元年五月戊寅伊豫國宇和郡人外大初位下凡直鎌足等各獻當國之分寺知識物並授外從五位下

八歲天平勝宝七年勅改年為歲十二月己亥越後丹波丹後但馬因

幡伯耆出雲石見美作備前備中備後安藝周防長門紀伊阿波讚岐土左伊豫筑後肥前肥後豐

後等二十六國々別頒下灌頂幡一具道場幡四
十九首緋網二條以充周忌御齊莊飾用了收置
金光明寺永為寺物隨事出用之

範序按今年正月乙卯太上天皇 聖武崩

天平宝字二年三月壬午伊豫國神野郡人少初
位上加茂直馬主等賜加茂伊豫朝臣姓

九月丁酉始頒越前越中佐渡出雲石見伊豫六
國飛驒鈴

四年 時廢帝大炊在位

四月丁亥伊勢近江美濃若狹伯
耆石見播磨備中備後安藝周防紀伊淡路讚岐

伊豫等一十五國疫賑給之

七年 時廢帝在位 八月甲申丹波伊豫飢並賑給之

八年 時廢帝在位 六月己酉伊豫國周敷郡人多治

比連真國等十人賜姓周敷連

十月己丑伊豫國人大初位下周敷連真國等二

十一人賜姓周敷伊佐世利宿祢

天平神護元年 孝謙天皇重祚 二月丙子相摸下野伊

豫隱岐等國飢賑給之

二年三月戊午伊豫國人從七位秦毗登淨足等
十一人賜姓阿倍小殿朝臣難波長柄朝廷遣大

山上阿倍小殿小鐮於伊豫國今採朱砂小鐮便娶秦首之女生子伊豫麻呂々々々不尋父祖偏依母姓淨足即其後也

九月丙寅伊豫國人大直足山私稻七萬七千八百束鋤二千四百四十口墾田十町獻當國々分寺授其男外少初位下氏山外從五位下

神護景雲元年二月庚子伊豫國越智郡大領外正七位下越智直飛鳥麻呂獻絕二百三十疋錢一千二百貫授外從五位下

六月辛巳伊豫國人白丁越智直國益授外從五

位下以獻物也

十月癸巳伊豫國宇摩郡人凡直繼人獻錢百萬紵布一百端竹笠一百益稻二万束授外從六位下其父稻積外從五位下

二年四月乙酉伊豫國神野郡人加茂直人主等四人賜姓伊勢疑豫加茂朝臣

八月癸丑賜大學直講正七位上凡直黑鞆伊豫國稻一千束并授其母從八位下賞勤學也

三年四月壬寅伊豫國溫泉郡人正八位上味酒部稻依等三人賜姓平群味酒臣

十一月壬辰詔畧伊豫國与利白禕鹿于獻奉天在
礼方有禮志典呂許保志止奈毛見流

○同書光仁天皇紀宝龜元年五月壬申先是伊
豫國負外掾從六位上笠朝臣雄宗獻白鹿初曰
朕以薄德祇奉鴻基善政未享嘉貺頻降去歲得
伊豫國守從五位上高圓朝臣廣在等進白鹿一
頭今年太宰帥從二位弓削御淨朝臣清人等進
白雀一雙乾坤降祉符瑞駢臻或瑞羽呈禕或殊
毛表貺良由宗社積德餘慶所覃豈朕庸虛敢當
茲應奉天休而倍惕荷靈貺以逾兢唯可与周德

而公卿佐治良吏弘政至道教卷上玄宣唯前倫
量施惠政但其貢獻瑞物勞逸不齊歟則難致鳥
則易獲如是之流量定奏聞於是左大臣藤原朝
臣永手右大臣吉備朝臣貞備已下十一人奏臣
等言畧白鹿是上瑞白雀是合中瑞伏望進白鹿
人叙位兩階賜絕廿匹綿世屯布五十端稻二千
束共捕白鹿五人各叙位一階牧長一人挾抄二
人各賜四百束捕鹿處驅使三人水手十三人各
三百束進白雀人叙位兩階賜稻一千束進瑞國
司及所出郡司各叙位一階又伊豫与肥後兩國

神護景雲三年以往正稅未納皆悉除免出瑞郡
田租免三分之一臣等准勅商量奉行如件伏
請付外施行制曰可

八月甲寅授伊豫守從五位上高圓朝臣廣古正
五位下掾正六位上中臣朝臣石根從五位下介
外從五位下板連真釣外從五位上負外正六
位上百濟公水通外從五位下外散位外從五位
下越智直飛鳥麻呂越智直南淵麻呂並外從五
位上以下肥後外掾等授位事畧並是貢瑞郡司去五月有勅進
位一階至是授焉

五年六月乙酉伊豫國飢賑之

十一年七月甲申伊豫國越智郡人越智直靜養
女收私物資養窮弊百姓一百五十八人依天平
寶字八年三月二十二日勅尽賜爵二級

○同書桓武天皇紀延曆三年七月癸酉仰阿波
讚岐伊豫三國令造山崎橋斷材

日來逸史天長六年十二月乙丑參議正三位
春原朝臣五百杖薨余延曆四年有罪降貶伊
豫國

十年七月辛巳伊豫國猷白雀詔國司及出瑞郡

司進位一級但正六位上者迴授一子其獲雀人
凡直大成賜爵二級并稻一千束授國守從五位
上菅野朝臣真道正五位下介從五位下高橋朝
臣祖麻呂從五位上

因記去年九月己卯攝津縣貢白鼠赤眼先是寶龜九年四月甲申攝津國
獻白鼠同年十二月癸未太宰府獻白鼠赤眼

八月甲戌作越前丹波但馬播磨美作備前阿波
伊豫等國壞軍于城宮諸門以移作長岡宮
十二月甲午伊豫國越智郡人正六位上越智直
廣川等五人言廣川等七世祖紀博在小治田朝
廷御在遣伊豫國博在之孫忍人便娶越智直

之女生在壬午之庚午年籍不尋本源誤從母姓
自爾以未負越智直姓今廣川等幸屬皇朝開泰
之運適值群品樂生之秋請依本姓欲賜紀臣許
之
統日本紀至延曆十年止

○日本逸史範序按日本逸史抄類出於類聚國史日本記畧公卿補任等者以編
之起延曆十一年春正月終津和天皇長三年二月記三十五年之事以繼統日本紀

延曆十一年閏十一月壬午朔壬辰伊豫國獻白
鹿

十二年六月庚午令諸國造新宮諸門尾張美濃
二國造段富門伊福部氏也越前國造美福門壬
生氏也若狹越中二國造安嘉門海犬甘氏也丹

波國造偉監門猪使氏也但馬國造彙壁門佐伯
氏也播磨國造待賢門山氏也備前國造陽明門
若大甘氏也備中備後二國造達智門丹治氏也
阿波國造達天門玉手氏也伊與國造都芳門達
部氏也

八月丁卯遊獵于大原野還御南園賜五位己上
衣是夜內舍人山邊真人春日春官坊帶刀舍人
紀朝臣國共謀殺帶刀舍人佐伯宿祢成人明日
事覺春日等即逃隱帝大怒募求天下後伊豫國
捕之以聞遣左衛士佐從五位上巨勢朝臣島人

格殺或曰春日等承皇太子密旨

十四年四月辛亥伊豫國獻物

十五年二月丁亥敕南海道驛路迴遠使令難通

因廢旧路通新道

日本後紀

範序按此紀在大正二位兼行左近衛大將藤原朝臣冬嗣等奉勅所撰
也冬嗣薨後十一年至仁明天皇承和八年藤原朝臣緒嗣等上馬而至後世殘
缺今僅餘十本可勝惜哉

延曆十六年正月戊子朔甲寅廢阿波國驛家

口伊豫國十一土左國十二新置土左國吾椅
舟川二驛

十八年八月癸巳伊豫國人從七位下越智直

祖繼貫于左京

十八年六月戊寅詔曰 曩去年不登稼穡被害眷
言其弊有憫于懷宜敷寬恩答彼咎祥其被損尤
甚之此美作備前備後南海道諸國肥前豐後等
十一國去年田租特全免之

十九年夏四月己巳朔庚辰以流未崑崙人所賚
綿種賜紀伊淡路阿波讚岐伊豫土左及太宰府
等諸國殖之其法先簡陽地沃壤掘之作穴深一
寸衆穴相去四尺乃洗種漬之令經一宿明且殖
之一穴四枚以土掩之以手按之每旦灌水常令

潤澤待生云云

日本後紀延曆十八年七月有一人乘小船漂
着參河國以布覆背有犛尾不着袴左肩着紺
布形似袈裟年可廿身長五尺五分耳長三寸
餘言語不通不知何國人大唐人等見之僉曰
崑崙人後頗習中國語自言天竺人常彈一絃
琴歌邑哀楚聞其資物有如草實者謂之綿種
依其願令住川原寺即賣隨身物立屋西郭外
路邊令窮人休息焉後遷住近江國之分寺
二十一年六月丁未敕令伊豫國配流人五百枚

王聽居府下

九月丁巳伊賀伊勢尾張參河遠江駿河伊豆甲斐武藏上総下総常陸近江美濃上野下野越前越中能登越後丹波丹後但馬因幡伯耆出雲石見周防長門伊豫土左等三十一國損田百姓免租稅徵調

日本後紀二十三年六月丁未^日近江丹波丹後但馬播磨美作備前備後紀伊阿波伊豫等十一國停進彩帛依旧貢納
二十四年十二月壬寅公卿奏議曰伏奉綸旨

營造未已黎民或弊念彼勤勞事須矜恤加以時遭災疫頗損農食今虽有年未聞復業宜量事優矜得存濟者臣等商量伏望取旨加_{中畧}又伊賀伊勢尾張近江美濃若狹越前越中丹後丹波但馬因幡播磨美作備前備中備後紀伊阿波讚岐伊豫等國殊免當年庸許之

○同書平城天皇紀大同二年十一月乙酉停大嘗事乱故也從親王并母夫人藤原吉子於川原寺幽之一室不通飲食甲午詔曰云々解卻謀反之輩又虜親王之狀告于拍原山陵大納言正三

位藤原朝臣雄友坐親王事配流伊豫國依外舅也中納言從三位藤原朝臣乙叡解官從四位上秋篠朝臣安人左遷造西寺長官乙未親王母子仰藥而死時人哀之

日本後紀三年十月丙辰東山道觀察使左近衛中將正四位下行東宮大夫安倍朝臣兄雄卒從五位上稷虫之孫元位道守之子也多文堪武性好大高直有耿介之節所歷之職以公廉稱伊豫親王無罪而廢當上盛怒群臣無敢諫者兄雄抗辭固爭卒不能得論者義之

因記伊豫親王無罪之事 史云大同二年十月辛巳藤子藤原宗成勸中務卿三品伊豫親王潛謀不軌大納言藤原雄友聞之告右大臣藤原內麻呂於是親王遽奏宗成勸已反之狀即繫宗成於左近府按檢及事宗成之首謀殺逆是親王也遣左兵衛督巨勢野足等率兵百四十人圍親王第

四年六月丙申敕觀察使兼帶外任暨停食封以公廩而陞奧國官多料少宜按察使公廩給便近之國又太宰帥公廩二萬束給因幡備前備中讚岐伊豫等五國者遠運費但非帶觀察使一依前例若大貳缺問其科者準帥闕時充用蕃客料九月甲辰朔乙巳改伊豫國神野郡為新居郡以觸上諱也 上謂嵯峨天皇是年四月丙子朔采城天皇禪位

○同書嵯峨天皇紀弘仁元年 大同五年九月改元為弘仁 夏

四月庚午朔甲戌大納言正三位藤原朝臣雄友
免罪入京授本位任官内卿

六月己巳朔丙申太上天皇詔曰去大同元年為
行十六奈茲置觀察使各委一道云々夫參議之
寄望重守大歸任責成朕非虛設是以廢置之云
云宜罷觀察使復參議辨封邑之制亦仍旧數畧
諸觀察使名南海道觀察使正四位下吉備朝臣泉中畧
各停使任參議

日本後紀弘仁四年二月甲辰二十日賜伊豫國人勳
六等吉備候部勝麻呂吉弼候部佐奈布留二

人姓野原

○同書淳和天皇紀天長五年冬十月乙卯美濃
國菩提寺伊豫國弥勒寺肥後國淨水寺預定額
寺

七年六月乙丑節婦伊豫國人風早直益吉女叙
位二階終身免其戶田租益吉女夫死後奉慕不
止落飾歸貞節操難奪所以叙之位階用旌貞潔
也

九年十二月戊寅伊豫國倭囚吉弼候部於止利
等男女五人移配河波國優情願也

○統日本後紀仁明天皇紀承和元年五月壬子
伊豫國人正六位上浮穴直千經大初位下同姓
直能等賜春江宿祢

二年十一月壬寅朔甲寅左京人正六位上越智
直年足伊豫國越智郡人正六位上越智直廣成
等七人改直賜宿祢

四年正月乙丑朔癸酉伊豫國人典藥權允物部
首廣宗其弟直宗等改本居貫附左京二條四坊
五月癸未伊豫國飢賑給之

六年十一月伊豫國人外從五位下風早直豐宗

等一煙賜姓善友朝臣兼除邊籍貫附左京四條
二坊天神饒速日命之後也

七年九月癸酉朔庚辰以伊豫國溫泉郡定額寺
為天台別院

十年六月壬午伊賀尾張三河武藏安房上總下
總近江上野陸奥越前越後丹後因幡伯耆出雲
伊豫周防等十八國飢救加賑恤

○文德實錄嘉祥三年三月上仁明崩五月太皇太后

后仁明天皇母皇后攝氏
古檀秋皇后亦崩先是民間訛傳今茲無母子三

日不可造祥

國史略母子草名漢曰瓦狗草三月三日取以置誥舌^{シヤノヒ}拜者後世文能本之本草綱目集解之
拜音板永餅也

識者聞而惡之果成其識故老相傳伊豫國神野
郡昔有高僧名灼然稱為聖人有弟子名上仙住
止山頂精進練行過於灼然諸鬼神等皆隨願皆
上仙嘗從容語所親檀越云我本在人間有同天
子之尊多受快樂爾時作是一念我當未去得為
天子我今出家常治禪病虫遣餘習氣分於我我
如為天子必以郡名為名字其年上仙命終先是
郡下孺里有孤獨姥号橘姬願尽家產供養上仙
上仙化去之後姬得審問泣涕橫流云吾与和尚

久為檀越願在来生俱會一處得相親近俄而姬
亦命終其後未幾天皇^{嵯峨}誕生有乳母姓神野先
朝之制每皇子生以乳母姓為之名焉故以神野
為天皇諱後以郡名同天皇諱改新居后時号橘
夫人所謂天皇之前身上仙是也橘姬之後身夫
人是也

新居郡金子村有上仙故居因數郡子足山村極峰寺有灼然古木像

天安二年八月戊戌丙供奉十禪師傳燈大法師
位光定卒光定俗姓贛氏伊豫國風早郡人也及
至弱冠遭父母喪服闋離俗隱居山林大同初向

京輦弘仁十三年帝聞光定在山資用絕乞別賜
乞食袋濟山中之急承和五年四月二日叙傳灯
大法師位四年奉制起四王院天安二年秋七月
帝聞年滿八十恩賞殊異施度者八人錄八十疋
調布高布文易布各八十段綿八十斤錢八万贯
米八十石病卒時年八十光定為人質直不事服
飭帝悅其質素殊加憐遇

○三代實錄清和天皇紀貞觀二年十月丁丑朔
己卯正五位下典藥正兼侍医卷河權守物部朝
臣廣泉卒廣泉者左京人也本伊豫國風早郡姓

物部首後隸京兆賜朝臣廣泉少學医術多見方
書天長四年為医博士兼典藥允遷為侍医累遷
伊豫讚岐掾侍医如故六年春授外從五位下為
内藥正侍医如故十四年授從五位下兼伊豫掾

或曰按十四年不應係天長據續日本紀文德實錄廣泉承和六年授外從五位下十二年
為内藥正天長元年為肥前介此条所書皆与前史不合盖有脱誤

仁壽四年授從五位上為肥前介内藥正侍医如
故天安二年兼卷河權介貞觀元年冬授正五位
下轉卷河權守内藥正侍医如故廣泉藥石之道
當時独步齡至老境鬚眉皎白皮膚光澤脉氣猶
強卒時七十六撰撰養要訣二十卷行於世矣

或曰按上文是年乙未為參河權守此所書亦誤

八年十月廿三日伊豫國浮穴郡置少領一人
十一月壬寅朔己酉八日割伊豫國宇和郡為宇和喜
多兩郡

九年十一月丙申朔乙巳十日下知檣洋和泉山陽南
海道等諸國曰如聞近未伊豫國宮崎打海賊群
居掠奪尤切公私海行為之隔絕凡可捕作賊之
狀頻繁仰下督促殷勤其後播磨備中備後阿波
等國言上獲賊之狀而寇盜難休流間如此實是
國司等欲消一境之咎不慮天下之憂無盡謀畧

不精搜捕之所致也夫海賊之徒洋洋南北唯徇
其利不恤其居追捕則鳥散寬縱則鳥合乃須緣
海諸國戮力同謀具記泯未之舟舩勤詳去就之
人物僮聞有奸謀則彼我相移差矣人兵招募倖
因搜其窟穴尋其風色窮討盡捕令無遺類
十二年十二月戊寅朔癸卯廿三日伊豫國宇和一本郡人
從七位上刈田首倉繼刈田首淨根等賜姓物部
連

十三年十一月癸酉朔乙酉十三日伊豫國越智郡人外
從五位下行直講越智直廣峯改本居貫隸左京

戕

十八年六月丙午朔^{廿七日}壬申元興寺僧德操元右京人長脊村主與日奉春岑同謀私鑄錢推問事迹德操不承伏^然衆證灼然須依格着^賦役仕有勅曰村主本是緇徒殊處中流是故配流伊豫國十月甲辰朔^{十三日}丙辰伊豫國言管風旱郡忽那鳩牛馬年中例貢馬四疋牛二頭其遺馬三百餘疋牛亦准之嶋内水草既乏蕃息滋夥青苗初生風逸踏破翠麥將秀解入食損百姓之愁莫甚於期望請^檢除^非年貢之餘皆悉^沽却以其價直混合正

稅詔從之

○同書孝光天皇紀仁和二年十月廿七日勅以伊豫國正稅穀千斛充齊宮寮承前之例齊内親王入太神宮之後以伊勢國正稅穀三千斛資新居之費今^因換以充之十一月丙子朔戊戌伊豫國新居郡始置主政一員

三年六月癸卯朔甲^{二日}辰伊賀伊勢尾張伊豆近江美濃越後丹後但馬出雲播磨備前備後紀伊阿波讚岐伊豫土左等十八國貢絹麻^惡特甚不如

昔日勅謔國宰探取正倉旧様絹每國賜一疋依
旧様作 一本作字上有織字

○日本紀畧朱雀天皇紀承平四年甲午五月九
日戊申詔奉幣使於山陽南海諸神祈平海賊

範序按詔字下疑脫也

國史畧承平三年南海賊起云；註伊豫國人

小野氏彥等



六年三月十三日辛丑於治部省修太元法為攘
海賊難也

六月某日南海賊逆首藤原純友結黨屯聚伊豫

國日振嶋設千餘艘抄却官物私財爰以紀淑人
任伊豫守令兼行追捕事賊逆聞其寬仁二千五
百餘人悔過就刑魁帥小野氏彥紀秋茂津時成
等合此餘人束手進奉降公卿即給衣食田畠行
種子令農桑号之前海賊 按公卿上下疑有脫文

國史畧承平六年以從四位下紀淑人為伊豫

守追捕海賊之帥小野氏彥等率衆降南海平

天慶

改承平八年為
天慶元年

二年十二月廿六日壬戌備前介子

高於根津國須岐崎為海賊首伊豫掾純友被圍
維放矢合戰隨兵負少子高乞降即得子高日口

太郎為賊被殺又播磨介嶋田惟幹朝臣為伴兵被虜掠

按被囿下太郎上疑有誤字脫文

國史畧天慶二年乎將門及取常陸陷上野狗

武藏相摸劫國守奪印鑰兇勢方盛自称親王

一作新皇

建都於下總國

在猿島郡石井御

備偽百官所

闕者唯曆博士身先是純友前伊豫掾招集海賊劫

掠南海山陽二道

王代一覽

林春齋先生應若狹國主酒井左少將忠勝之承而所編集曰上畧

始ノ將門純友同時ニ在京レ比叡山ニ上リ平安城ヲ直下シテ互ニ逆心ノヲ相約シ水意ヲ遂ハ將門ハ王孫ナレハ將門ハ桓武天皇ヨリオホノ孫帝王トナル可シ純友ハ藤原氏ナレハ關白タルヘシトナリトナシ承平年中ヨリ將門ハ關東ヘ赴キ純友ハ伊豫ニ在リ少々峰起シテルカ今年其純ヨリ建ヘス東西ニ一度ニ起テ天下騷動シ洛中靜ナラスト畧

三年三月四日庚午定捕南海凶賊使

今年二月十三日乎將門伏誅

六月廿二日賜勅符於近江國應徵登兵士百人

為討阿波國也

廿六日讚岐國飛驒使未頃之阿波國飛驒使未

云讚岐伊豫國為賊被虜掠備後國舟為賊被燒

之由

廿七日庚申給勅符於國々召兵師又祈諸神定

所々警固使等

廿八日辛酉奉幣於伊勢以下諸社奉寄封戸廿

五煙於石清水八幡宮依祈兵乱也
廿九日壬戌紀伊國飛驒言南海賊事於天台山
始五壇修法於法琳寺始修太元法

九月四日奉贈

諸國神位階

十月廿二日甲寅安藝國周防國飛驒使來言太
宰府追捕使左衛門督相安等兵為賊被打破由
十二月十九日庚戌土左國言幡多郡為海賊燒
已合戰之間御方人死賊預多中箭死者

國史略是歲春秋阿波國言賊掠讚岐伊豫等
國讚岐今國風奔淡路乃發諸國兵士分遣警

固使既而國風歸讚岐舉兵進討純友敗走行
暴掠土藝周等又陷太宰府征南海賊使小野

好古

太宰大武
葛經之子

及藤原慶幸大藏春實等分兵海陸

相攻純友航海而走急追之擲炬焚其艦之燃

衆潰純友僅以身免還伊豫本國警固使攝遠
保誅之斬首函送京師誅其子重太九及餘黨

四年正月十六日日追捕海賊使解文到來
二月九日己亥讚岐國飛驒來云兵庫允宮道忠
用藤原恒利等向伊豫國頗擊賊類

十日勅符於讚岐國

廿日甲子中納言兼太宰權帥從三位橘口口公

頼 兼序按此已下疑有闕文其意重寄辭然所記恐亦闕純友事後君子請換佳本而補焉

五月十九日戊寅征南海賊使小野好古飛驒言

賊徒於太宰府口口口口口口及以參議右衛門

督藤原朝臣忠文任征西大將軍又任副將軍々

監以下

七月七日乙丑傳賊徒藤原純友重太九頭或云

高階遠保誅純友

八月七日甲子征討使右近衛少將小野好古入

京

○前太平記純友聚徒黨條ニ伊豫掾藤原純友ハ伊豫ニ

下り 先是平將門ト心ヲ合セ及逆ラ企東西ヨリ起レトヲ約ス

昼夜旦暮隱謀ノ外他事ナク心ヲ碎クト虽西海南海悉ク王化ノ

波穩ニ一人トシテトスル福朝家者無リケレハ誰ニ斯ト可言出様モ無

ク其身ノ分限ヲ以討テ出クレハトテ僅ノハ勢ナレハ惣ナル軍シテ隣

國ノ武士凡ニ打破レシモ思慮ナキノ至リナリ如何セシト案レ煩ヒ

空ク先陰ヲ送リケルカ此ト思ヒ出シタルコ有テ俄ニ宿紙ヲ漆出シメ

令旨ノ文章ヲ書テ令旨ハ平將門ノ偽令ニ旨ナリ此令旨ノ未ニ承平二年四月九日ト云箱ニ納メ海賊等ニ授ケ

諸國ニ遣シテ軍勢ヲ催促セシム

承平四年伊豫掾純友山陽西海南海三道ノ海賊ヲ聚メ我身

其張本トシテ伊豫國日振島ノ沖ニ千餘艘ノ舟ヲ屯シ海ト往來ノ官
物ヲ掠取リ其外家々ノ私財雜貝數ヲ尽シテ却シ奪フ國中爲之被
惱人民不安居

承平六年三月十日紫宸殿ニ於テ花ノ宴ヲ催サル是日伊豫國ヨリ
脚カ到来シテ純友ノ蜂起ヲ去月廿八日賊徒ト合戦ノ体ヲ註進ス
則テ式部少輔紀淑人武内宿祢十六在紀長谷雄次男ヲ伊豫守ニ任シ不

日ニ下向シテ鎮ノ誠ム可キノ旨被仰下

紀淑人ノ純友討手ノ大将トシテ同幸四月十二日都ヲ打立玉ヒ渡部
神寄ヲ賊シ同月十六日解纜十七日明石ノ賊徒小舟ヲ馳テ降ラ乞
同二十日海上無恙伊豫國三津濱ニ着玉フ

同二十一日淑人三津濱ヲ打立トシ玉ヒケル處ニ旗一流差セテ其勢
二百騎ハカリ當國目代橘遠保来リ會ス淑人因テ合戦ノ意見尚
遠保云去ル二月當國別宮ニテ決勝負ノ刻味方利無シ故ニ暫ク
山林ニ身ヲ隠シ國司ノ部下向テ相待テ候就中昨夜潜ニ忍テ入テ敵
ノ城中ノ様ヲ伺ヒ見スルニ將ノ心驕テ軍ニ有怠ト見ヘテ候則チ大手ヨ
リ脚勢ヲ被向來遠保カ手勢ハ城中ノ業内能存知ル者共ニテ候ハ擲
手ヨリ回リ唯一擲ニ攻落サレテ不可回踵候ト理ニ當テ被申ケレハ淑人
信服アリ誠ニ此義可然覺候去テカラ脚勢ハカリニテハ餘ニ不足ニ候
ハハ当手ノ勢ノ中少ク被召加候ヘトテ物馴タル兵百二十騎遠保ニシ
被付ケル斯ニ大手擲手都合千八百餘騎純友カ籠タル道前道後

ノ境ナル高繩城ニ押寄テ時ヲドットソ揚タリケル中略城中終ニ戦負ケ
唯落支度ノ外ハ無シ爰ニ純友カ腹心ト頼タル伊賀壽太郎同二郎兄
弟此有様ヲ見テ大ニ怒テ申ケルハエ、無言甲斐者共カ振舞哉能ク
モ加様ノ徳病ナル所存ニテ斯ル大儀ノ謀反ニハ与セシヨナイテハナバカ花ナ
ル一軍シテ可見トテ一ノ木戸ヲ推開キ人マセモセス兄弟二人鋒ヲ双ヘ
切テ出近ツク敵ヲ幸ニ立割母衣付車切弓手ニ相付妻手ニ受
馳倒シテハ首ヲ取ル兄弟ク手ニカケテ二十七騎切テ洛シ三十二
騎ニ手ヲ負セ氣色奪タル有様ハ實ニ目冷クソ見ヘケル守等手
是ニ被追立只遠矢ニソ射タリケル純友是ヲ見テアレ討スナ続ケ者
共ト下知シテ其身ハ猪好ノ大口ニ黒絲ノ鎧着テ一丈有餘ノ檜木ノ

棒ヲ引提ケ舍弟前右衛門佐純兼同四郎正純同七郎大夫純行兄
弟主従三十七騎ドットヲノヒテ菟出タリ中畧寄手此勢ニ辟易シテ
取次ニ成テ引退シ此時城中ハ早敵入替タリト覺テ櫓搔立ニ火
ヲカケタリ純友是ヲ見テ今ハ戦是迄ナリ一先命生延テ重テ起
大軍可遂素意ナリトテ東ノ尾高ニ扣ヘタル三百餘騎カ中ニ驅入テ
打破リ其後ハ死生不知ニ成ニケリ 純友遂電ノ条ニ

純友カ弟春宮権亮純素ハ朝廷ノ沙汰ヲ聞レ為ノ帝都ニ忍ヒ若シ
討手下ラハ道ニテ不意ヲ襲レト賊徒ヲ爰彼ニ伏セ置ケルカ將門ニ示
シ合ス可キヲ有テ去ル二月上旬下総ニ下リ既ニシテ歸路ニ赴キ尾張
ノ熱田直上リケル時京都ニ云々ノ事ニテ伊豫國へ討手下リ

浴中以外騒動ノ由沙汰シケレハ由クシキ大事出来タレ急キ
摂津ニ下リ勢ヲ集メ渡部神寄ニテ一軍センモノト夜ヲ日ニ繼テ
路ヲ急キ四月十七日摂津國芥川ニ着ク爰ニテ聞ケハ討手ノ大将ハ
昨日渡部ヨリ出帆シ玉フトニ純素カ無ク跡ヨリ追カケ夾ニテ討取
ント其勢八百バカリ小舟三十餘艘ニ取乗テ曳巻出シテ馳タリケ
ル程ニ十九日之曉ニ讃岐國箱ノ岬ニ着ク爰ニテ軍ノ手分シテ
相圖ヲ定舍弟八郎純素ヲ大将トシテ十餘艘ノ人數ハ陸ニ上リ
陸路ヲ經テ搦手ニ向ヒケル^考程ト伊豫守淑人ハ去ル十七日
明石ニ賊徒降ラヒシカ氏若シ偽テ跡ヨリ寄ル^トモヤ有レス
ラント推量シテ舍弟五郎門佐淑人ヲ大将トシテ三百餘騎ヲ

引合テ三津ノ濱ノ在家ヲ毀テ搦手ニ搦テ濱面三丁カ程馬ノ
カケ場ヲ残シ逆兵引テ固ノラル斯テ純素カ勢三津ノ濱ヨリ
上ラレト合戦始リ雌雄未決処ニ純素百五十騎湊ヨリ廿餘
丁東ノ海士通フ細路ヨリ上リテ寄タルニ横合ヲ討レ淑人遂ニ
打負テ南ヲ指テ引退ク斯リケル處ニ讃岐ヨリ上陸セシ八郎純
素ノ相圖ノ時ヲ違ヘレト昼夜ヲ不分急シカ高繩藩城ノ火ヲ見テ
大手ノ合戦始リレ相圖ノ火ト心得テ人馬ノ息ヲモ繼セヌ搦テカ
ケツケ高繩城へ馳上ル淑人ハ城ノ燒跡ニ首實捺シテ坐セシ処ニ八郎
純素カ勢三百餘騎透間モナク切テカル破多野右エ門カ五百餘騎
寄合セテ防之純素ハ血氣盛ノ若武者ナレハ射凡抑レ不用シ

テ直先カケケ戦ケルカ流矢ニ胸板ヲ射抜レ真倒ニ馬ヨリ墜ッ淑
人ノ兵勝ニ乗リ驅立切立シケルニリ賊兵大ニ敗北ス春宮権亮ナ
純素ハ三津ノ濱ノ軍ニ勝チ淑人ノ本陣ヲ撃シト旗ヲ進メラ未シカ此
未ル身方ニ被押立思クス湊ヘ引返ス波多野カ勢勝開作リ一人
モ餘サレト追カケル純素馬ヲ立直シ返セト下知スレ氏更ニ
耳ニモ不聞入手負ヲモ不助乗越イ落行ケルサレハ高繩城ノ
麓ヨリ三津ノ濱ノ湊直道ニ里カ間人馬上カ上ニ重リ死シ尸ハ
積テ壘々タリ始ハ八百餘騎ト聞ヘシ寄手僅ニ廿人ハカリニ成ケ
レハ純素今ハ無為方三津ノ濱ヨリ小舟ニ乗テ備前ヲ指テ落
行ケリ仍之暫クハ國中無事ニ成ニケリ

天慶三年二月将門純友誅伐ノ為節度使東西へ下向江東
大將軍ニ参議右衛門督藤原忠文副將軍ニ同舍弟刑部
大輔忠舒故位前武藏守源經基征西將軍ニハ左衛門佐藤原
倫實ナリ倫實六千餘騎ヲ引率シ二月十三日都ヲ発ス
此時純友ハ中國ヲ攻メ平ケ九洲ニ渡リ五月十日太宰大貳公頼ヲ
追落シテ太宰府ニ入替リ兇勢甚ク熾ナリ東國ハ子貞盛藤原
秀郷ノ武功ニ依テ平定セシカハ忠文經基ハ四月上旬清見カ關
ヨリ引返ス西海ノ賊徒日ヲ追テ蜂起スト聞ヘケレハ重テ追討使
トシテ右近衛少将左衛門佐小野好古故位前武藏守源經
基王ヲ大将トシ都其勢五萬餘騎六月廿四日都ヲ立テ発向ナリ

四年正月西國未平筑紫ニ官軍ハ豊前菱形山ニ陳ヲ張り
純友ハ太宰府純素ハ同國黒崎ニ楯籠ル

去年十月純友純素兄弟不和事起リ其勢三萬餘騎ヲ引分テ純素ハ
黒崎ノ城ニ居ル其事ノ起リハ相崎ノ千代ト云ヘル遊君ノ美セアリ純素聞及
ニテ台寄スル処ニ純友踏次ニ兵ヲ伏セテ奪之是不快ノ根元ト云ク

同年二月ヨリ左馬助源満仲黒崎ノ城ヲ攻ラル中畧三月十二日純素
遂ニ伏誅先是伊賀壽次郎黒崎ノ城ヨリ討テ出勇戦セシカ

終ニ遠山左卫門三郎宗持カ為ニ討ル

他書ヲ按スルニ經基征東ノ副將トナリテ清見関直赴レレテ記セ氏征西ノ將ナリ
テ満仲ト父子筑紫ニ向シテラ載セス前太何ノ書ニ拠ルヤ可疑

五月純友筑前國博多箱崎ノ戦ニ打負ケ一門兄弟残ナク討
死セシカ純友未練ノ心起リ先年伊豫ヲ出し時重太九

純友ノ未男ナリ
長男ヲ伊豫太郎

有信次男ヲ伊豫太郎
純年ト云フカ母ヲ残シ置ツルヲ思ヒ出し彼モ由有ル者ナシハ

古ノ好争カ可忘憑テ一身ヲ隱し出家入道ノ身トモナリ命ヲ延ト
思付マシコリ責テノト云ナカラ浅間シカリシ心中ナリ武島五郎

秀之自害ヲ進シ氏不用ケシハ大ニ怒テ即足十三騎ト渚ニ上リ大宅
次郎カ一陣ニカケ入テ一人モ残ラス討死ス此間ニ純友ハ引違ヘテ

雜人ノ衆タル小舟ニ乗替落タリケル諸國賊徒ノ敗軍ヲ聞テ九
州ハ不及申山陽四國如シ落人ヤ未ニスラント其國々ノ守護國

司津之浦ニ兵ヲ出し関ヲ居テ固メタリ中ニモ伊豫國三津濱
ヲ固メタル目代橋遠保ハ智勇兼備ノ者ナリケレハ兼テ思ケルハ

當國ハ賊徒ノ本國ナレハ純友カ宗徒ノ一旋ナトノ逃去ルヲモヤ

有ント遠慮ヲ回ラシ態ト演邊ニハ一人ノ兵ヲモ不置逆水ノ一本ヲ
モ不引何トナキ体ニ見セテ後ナル峯ニ付候ヲ居テソ窺ヒケリ
純友ハ斯レ不知六月十日ノ曉方ニ竊ニ三津ノ濱ヨリ上テ向ラ此ト
見遣タレハ菴水ノ旗一流指上テ勢ノ程四五百騎馬煙ヲ立テ驅来
ル純友少モ不驥是体ノ敵何程ノイヲカ仕ツ可キゾ打破テ通ラ
ントテ百八十六騎ノ兵氏拔連テ進クルニ此ノ藪陰彼ノ畔ノ間ヨリ
百騎二百騎驅出タレハ賊徒等案ニ相墮シテ中畧 遠保カ兵所
間モナク打圍テ餘サレト攻タリケル間賊徒争カ可堪未タ羊尅モ
過サルニ百八十騎討レツ至從六騎ヲ残リケル純友モ今ハ是非ナ
キ所ト思ヒ定ノ多勢ヲ引受ケ戦ヒケル素ク力量打物ハ三道

毎双ノ手利ナリケレハ弓手妻手ニ相近ケ見ルカ中ニ三十二騎斬
テ落シケル程ニ左右ナク寄合ス者モ無ク唯十方ヨリ鏃ヲ汰ヘテ
射タリケリ遠保ハ去ル承平ノ比当國ノ別宮ニテ純友ニ一戦ニ負
ケリケレハ其戰辱ヲ雪ント思ヒ相搦ヘテ生捕ニセヨト下知シ
ケル間諸卒皆主ヲハ不射棄タル馬ノ太腹平頸草脇ヲ目懸
テ射ケル程ニ此馬サシモノ逸物タリト虫大事ノ矢カ助直被射
立遂ニ倒テ死ケリ斯レ処ニ即没モ所トニテ討レ重太丸モ
生捕レ眼前ニ敵ノ陣中ニ引レケルヲ見テ純友目モ暮レ手モ痺テ
責テハ奪返シ我手ニカケ冥途ノ旅ヲモ伴ント大手ヲヒロケテ追
カクルヲ東西ヨリ寄合遂ニ搦捕ニケリ遠保下知シテ親子ヲ獄ニ

繫レカ其後親子ヲ遠保カ前へ引出シ中畧明日都へ可引トテ父子
共ニ間ナル所ニ推籠置タリケルニ此口大ニ痛ニ純友ハ其夜叫ビ死ニソ
死ニケル重太丸ハ其後六条河原ニテ首ヲ刎子又子氏泉木ニ掛ッ
タリケル

重太丸カ外祖父栗山將監入道定阿ハ先年純友隱謀露顯
シテ伊豫國ヲ出奔セシ時定阿入道モ重太丸カ舅ニテ當國ヲ
立退キ土左國松尾坂ト云所ニ忍ヒ居タリケルニ純友一族不殘
討レ重太丸モ擒ト為テ於京都被誅ヌト聞シヨリ彼母恩愛ノ
悲歎ニ不堪慟哭ノ餘ニヤ物狂ク成テ今年八月十六日思ヒ死ニ
ソ失ニケリ定阿入道不堪悲憤重太丸カ當ノ歎テハ掃遠保ヲ

討ント即後ヲ驅催シ百騎ハカリ九月五日ニ折立テ遠保カ館へ
ソ向ビケリ遠保ハ浮穴ノ城ニ居タリレカ當國明石ト云所ニ臣
徒ノ餘類有ト聞ニ家子葛野孫八郎成忠三百餘騎ニテ向シ
ノ事故ナク討取生捕數多引見シテ九月八日暮程ニ浮穴ノ城
へ歸リケルニ菅生ト云處ニテ無端栗山カ勢ニ行合タリ成忠馬ヲ
扣ヘ生捕野間新五ニ誰ソト問ヘハ純友カ舅栗山入道定阿ト答
フサテハ好敵ヲ餘スナトテ射手ヲ進メ楯ヲ並ヘテ待カケタリ定阿
入道心得タリトテ士卒ヲ進メテ戦レカ定阿遂ニ討負テ生捕ニ
ソセラレケル

右前太平記畧記

○五代一覽曰朱雀帝承平四年山陽南海々賊
起ル官兵ニ命シテ之ヲ捕シム
六年六月南海々賊張本藤原純友其徒黨ヲ集
シ伊豫國日振嶋ニ千餘艘ノ舟ヲ聚メ海上生
赤ノ官物ヲ奪取ル依之紀淑人ヲ伊豫守トシ
テ遣サル淑人仁愛ヲ以ナツケシカハ海賊暫
クシツマル
天慶二年乎將門關東ニテ乱ラ起シ常陸國へ
攻入り其伯父常陸大掾平國香ヲ殺シテ一國
ヲ押領ス以下有夫ヨリ武藏守貞志王ノ勸ニ依テ

上野下野上総下総武蔵相模ヲ打後一^{或新}下総國
猿嶋郡石井郷ニ都ヲ立自^皇ヲ平親王^{或新}ト称シ
左右大臣以下百官ヲ置ク唯曆博士ハカリ無
シ心ノ終ニ賞罰ヲ行フ<sup>或ハ下総國相馬郡ニ
王城ヲ造ルニ云</sup>
同時藤原純友海賊等ヲ誥ラヒ伊豫國ヨリ討
テ出備前介子高ヲ捕メ播磨介嶋田惟幹ヲ擒
ニシ南海ヲ掠メ山陽山陰西海ヲ奪メトス始
メ將門純友同時ニ在京ニ比叡山ニ上リ平安
城ヲ直下シテ互ニ逆心ノ事ヲ相約シ本意ヲ
遂ハ將門ハ王孫ナレハ<sup>將門ハ桓武天皇
ヨリ五代孫</sup>帝王トナル

ヘシ純友ハ藤氏ナレハ関白タル可シト言リ
トナレ承平年中ヨリ將門ハ關東へ赴キ純友
ハ伊豫ニアリ少々蜂起シケルカ今年其約ヲ
違ヘス東西ニ一度ニ起テ天下騷動洛中靜ナ
ラス此時源經基王武藏ニ居ラレケルカ急キ
上洛シテ將門返逆ノ事ヲ言上ス其早ク註進
スルニ依テ位ヲ授ラル經基ハ貞純ノ子ナリ
貞純ハ清和第六ノ皇子ナル故經基ヲ六孫王
ト号ス始テ源姓ヲ賜ル
三年二月參議右卫門督藤原忠文ヲ征夷大将

軍トシ其弟忠舒并源經基ヲ副將軍トシテ関
東へ遣サル小野好古大藏春実等ヲ將軍トシ
兵船二百餘艘伊豫國へ發向ス東國ニハ二
月朔日下野押領使及原秀御常陸掾手貞盛國香子
陸奥下野ノ勢ヲ催シ一万九千人ヲ率テ將門
ト合戦シ十三日下総國島廣山ノ壘ヲ燒
十四日將門自ラ出テ幸嶋ニ戦ヒ貞盛カ矢ニ
中テ馬ヨリ落ツ秀御馳寄テ頸ヲ叩ル同時其
没類百九十七人ヲ殺ス
三月廿五日將門カ首京都ニ至ル 四月忠文

等清見関ヨリ歸京ス
純友ハ伊豫讃岐阿波淡路ヲ掠ケルカ阿波介
國風ト合戦シ純友利ヲ失テ引退キ其ヨリ又
上左安藝周防等ノ國ヲ乱妨シ直ニ太宰府へ
赴キ官物ヲ奪取ル討手ノ大將小野好古等純
友ヲ追テ太宰府へ赴ク
四年五月小野好古等筑前博多津ニテ純友ト
合戦シ藤原慶幸大藏春実身命ヲ捨テ相闘ヒ
火ヲ放テ賊船ヲ燒ク 六月純友戦敗レ付送
者或ハ降リ或ハ逃亡シカハ純友ハ小舟ニ乘

テ伊豫へ逃歸ル当國ノ警固ニ居ケル橘遠保
ト云者純友死ニ其子重太丸ヲ討殺シテ首ヲ
都へ送ル或云純友生捕レテ獄中ニ死クリト
云 八月小野好古歸京ス



淡路島に在リテ
國府に在リテ
此書は
奉前
...

3
し

し

八月
日
...

大正
...

...

